



旅

たび

ボヤンヒシグ

僕が生まれて初めて地球儀を目にした時のことである。世界はこの小さなボールに乗っている、と先生が言っていて、それを僕にプレゼントした。〈世界…〉はここだとずっと思われた草原の上に立って、他に「世界は…」と聴いても、それがいったいどのくらい大きいものか、さっぱり分からなかったけれど、〈世界〉を僕の震える手で回してみた。意外に軽く、速く回っていた。何かを征服したような妙な快感が僕の全身を走った。

でも、その地球儀で自分の田舎の位置を確かめようといくら探してみても、名前さえ載ってなかったのが不思議だった。だいたいのところ、ここだとマークを付けたのは、旅から帰ってくる時、道に迷わないようにと、考えたからだろうか。

それから、その右側へ、つまり東へ目を移す。これは僕たちモンゴル人が、毎朝起きてからかならず先に東を見る習慣に由来する。そこには海があり、蒼い蒼い海原の上に細長い島が浮かんでいた。その上に〈日本〉と書いてあった。モンゴル語でいう〈ナラン ウルス〉(太陽の国)である。その東にさらに限りなく広がる海を見て、僕はすこし心細くなり、太陽が出てくるという〈島〉のところに思わず目を落とした。

想像力は躍動する——“ナラン”という名の巨大な〈鳥〉がそこに〈巣〉を持っているのだ。“ナラン”が巣を出て、草原の空を西へ西へと向かって飛ぶのを追って行けば、この太陽の国にたどり着くのではないか——

この三十年も昔の心の旅は、いつしか言葉の旅になっていた。

僕は八年間、日本に〈巣〉を持って、日本語あるいはナラン弁で色んな〈鳥〉たちと共に囀っていた。言葉は僕の中に〈巣〉を持っていて、その力で僕は旅している。われわれの言葉はまるやかな宇宙儀であるのだ。宇宙の無限を様々な言葉でまらめて、その上に無数の経緯を描くのが、つまりコミュニケーションである。

今は日本を後にして三年目だが、日本語がさっぱり分からない人と話している時、突然口から日本語を零すことがある。特に慌てる時はそうだ。記憶にしっかりと焼き付けられた一つひとつの単語が一本一本の綺麗な羽毛だろうか、または内側から射してくる一本一本の光線だろうか。

日本語で磨いた僕の宇宙儀がいつも僕の深層の中に回っていることは確かだ。時にいくつかの単語が自然に零れることは自分に対するある種の確認であり、旅の途中で描く美しいマークでもある。

(詩人)
しじい